中村哲さんの遺志継ぐ

銃撃死2年 福岡で追悼

中村哲さんを追悼する会で講演するペシャワール会の村上優会長（左）＝福岡市中央区で27日、平川義之撮影

アフガニスタンで人道支援活動を続ける福岡市のNGO「ペシャワール会」の現地代表で医師の中村哲さん（当時73歳）が2019年、現地で武装集団の凶弾に倒れてから12月4日で2年になるのを前に27日、同会主催の追悼の会が福岡市中央区で開かれた。出席者は「中村さんの遺志を継いでいく」と改めて誓った。

会場は新型コロナウイルス対策で席数を250に制限したが、事前に定員に達した。壇上には中村さんの他、ともに亡くなった現地スタッフら5人の写真も飾られ、冒頭に出席者全員で黙とうをささげた。中村さんの活動をまとめたビデオが上映され、現地スタッフからの「中村先生は私たちの心の中でずっと生きていて、今もその仕事の後を追っています」とするビデオメッセージも寄せられた。

現地は大規模な干ばつによる食糧危機に加え、8月にはイスラム主義組織タリバンが実権を掌握。欧米各国の経済制裁も加わって活動の継続が難しさを増している。家族代表であいさつした中村さんの長女秋子さん(41)は、アフガンの人口の半分以上が飢餓線上にあるとする国連機関の報告に触れ「何より優先すべきは人の命。生きていくために必要な支援が滞ることは決してあってはいけません」と訴えた。

また、ペシャワール会の村上優会長(72)は政権交代や欧米各国の経済制裁などにより、現地の銀行の預金引き出しに制限があり、日本から送金もできず、資金調達に苦慮している現状を報告。かんがい用水路事業に使う重機の燃料や医薬品などの確保が困難で、農産品を売るなど工夫しながら活動しているという。閉会後の記者会見で村上会長は「困難な状況でもできる事業をコツコツやって、希望を絶やさないようにしたい」と意気込みを述べた。

出席者の一人で、活動を支援してきた中村さんの小学校の同級生、阿部成仁（なりと）さん(75)＝福岡市東区＝は「現地の政権が代わってどうなるか心配していたが、哲ちゃんの遺志が受け継がれていることがわかって良かった。ずっと続けていってほしい」と話した。

【平塚雄太】